

名胡桃城址保存会創立に際しての裏話

名胡桃城跡保存会長

内海 文之助

我が郷土に昔から城があつた事は土地の人は誰もが知つて居つた。しかしながら、名胡桃城が何でどんな理由で有名なのか、由緒については殆どの人が知る由もなかつた。

大正の初期私が沼中二年の時であつた。全校生徒が沼田より城址迄遠足が行われた。此の企ては中山校長の発案であつた。中山先生は漢学の大家で特に日本外史を愛読し頼山陽を礼賛して居つた。巻の十五に真田関係が詳らかに書かれて居る事を始めて聞かされ由緒を知る事が出来た。それから数年後大正十二年に至り、城址保存の事が地元で初めて話題に上つたのである。動議は異議なく決定せられ、発案者であった関係から私と、今は亡き高橋茂三郎氏が発起人となり委員会を設け発足したのである。保存会の頭初計画としては先ず第一に本丸、並に奥の台地を買収して公園とする事、本丸に一大石標を建てパンフレットを作り、城址を天下に紹介し宣伝に務める事であつた。いずれの仕事でも先立つものは資金である事は、昔も今も変りない大きな悩みであつた。当時としては莫大な千円が寄附の目標であった。これが募集については特別世話人を依頼して募金をして頂いた。世話人は高橋総次郎外二十五名

竹改戸、高橋栄三郎、千明長松、林半之助、小川嶋、千明和三郎、竹内倉蔵、小林幸作
上津下区、高橋市郎、斎藤孫三郎
上津上区、金古儀一郎、高橋弥惣治

以上三十六名に上る人達が極めて熱心に寄附集めに努力して下さつたお陰を以て千二百円と云う様な高額に達した。

その当時として城址保存と云う様な仕事は極めて困難な事であつたが、曲りなりにも計画通り事業の出来たのも、この莫大な淨財の賜ものであり深く感謝して居る次第である。

其れにつけでも当時の世話人が爾來四十五年間に全員故人になつて仕舞つた。今更ながら世の移り變りに感を深くするものである。

第一に手を付けたのが土地の買収交渉であつた。本丸は当時高橋角十郎氏の所有であり心良く趣旨に賛成して下さつた。又奥の高台地は真庭の己弥太氏の所有であり、お話申し上げたところ、之又心良くしかも寄附を以て応じてくださつたのである。

次に本丸に石標を建立する事となり碑面の揮毫は一代の文豪史界の権威者徳富蘇峰先生にお願いする事にした。先生が赤坂山王下に住居されて居つた時で、恐る恐るお願ひしたところ、二つ返事で快諾された。それのみならず成るべく大きいのを建てる様にと督励迄されたのであつた。

先生一代の大事業であつた。近世日本国民史のしかも豊臣編の執筆最中で特に真田関係の研究のところへ、真田ゆかりの城址へ建碑と云う如何にもタイミングが非常に良かつた

事が幸いであつた。

現在の標石は一丈一尺あるが、揮毫された先生の原本紙が此の大きさで、先生曰く是より小さい物を建てるなどのお声掛けであつた。

私達地元の委員会としては経費の関係から、もっと小さいものをと考へて居つたが、大物となり、又碑石は地元の自然石を用いたかったので一苦労した訳である。碑の原石は

富士山の八合目石いし小嶺こりょうと云う石材の累石して居るところがあるが、その中から見つける事が出来た。

引き出しには大きな土櫻を作り土引きを以て数百人の人手に依り、よいと巻けの木遣音頭も勇ましく到着した様な代物である。

彫刻については郡内の石工に交渉して見たが、自然石にそのまま彫るので誰も手の出しが無く、当時発電所工事に来て居つた渡り者の、小林啓三なるものがこの話を聞いて來り曰く、私も石工を終生の業として居り、此の様な大物を一代の記念として後世に残したいから刻ませてくれとの申し出で、委員会でも渡りに舟と彫らせる事にした。

現地に小屋掛けして秋から一と冬掛かつて、完成した碑は立派な出来栄えであつた。

大正十二年に計画を立てて数カ年、途中世の中は大正より昭和に移り昭和二年の秋にようやくにして第一期計画は予定通り遂行する事が出来た。翌年昭和三年十一月二十五日を期し除幕式挙行の運びとなつた事は、時恰も御大典記念行事の年であり、全国津々浦々世上を挙げての奉祝記念の最中であつたからである。当日は秋晴れの菊日和りで、現地で神式に依り取り行われた。来賓には近郷の村長さんを初め、特に竹改戸出身織物新聞社長柳淵勇次郎氏を招待したこととも思い出の一つであつた。只一つ残念なことは蘇峰先生が自ら御来郷して下さることに御内諾があつたのに急に、不來となつたことであつた。

引幕は発起人である茂三郎氏の愛娘さと子さんの勞に依り意義ある除幕式が行われたのである。引き続いて今回の事業には莫大な勤労奉仕があつたので、その勞をねぎらう感謝の為、二日間の慰安興行を催した。

場所は中村天満宮の舞殿を利用し、芝居一座は中村愛之助一行で、特に伊達藏を客座に加えた田舎巡りでは一流のものであつた。

この二日間の興行代は金八十円で相当高い買金であった。この外に多少の花を出すのが芝居興行の定めである。名胡桃は古来地芝居が盛んな處で、吳桃一座と云う天狗連迄組織され素人でも可成上達の人多かつた。役者もこの様な土地に乗り込んで來るので、一生懸命にやり評判は誠に良かつた。

掛け舞台の芝居も当地方では之が最後となつた。時は流れてここに四十五年を迎えて本年は明治百年の記念すべき年を迎えたので、之を記念して四月二十日の城址記念日を期し副碑を建立名付けて「温故知新之碑」と編す。昔を偲び更に今後史蹟保存の愈々全からん事を祈念する次第である。回顧ここに四十五年、保存会創立当時の思い出裏話の一端を録した次第である。